

残さず食べる!

日光山輪王寺強飯式

日光山輪王寺に古くから伝わる「強飯式」が、四月二日、三仏堂で行われました。

強飯式は、平安時代、峰修行の修験僧が山々を巡り歩いて、各場所で本尊に供えられたお供物を持ち帰り、里の人々に分け与えたものが始まりといわれています。

江戸時代には、東照宮に参拝した諸大名に大盛りのご飯を強いたところから「日光責め」と呼ばれるようになり、ほぼ現在の形式になったという事です。

ホラ貝と雅楽の先導で、僧、強飯頂戴人が入場、入口の戸が閉じられ、ロウソクの明かりだけになった堂内で護摩が

たかれたあと、かみしも姿の頂戴人に大杯のお神酒や、特大おわんの「三升メシ」といわれる四十杓ほどに盛り上げられたご飯を突き出し「七十五杯、一粒残さず食べる!」と、責め立てました。

堂内に詰めかけた大勢の見物人は、目の前で繰り広げられるユーモラスななかにも荘厳な儀式を楽しみました。

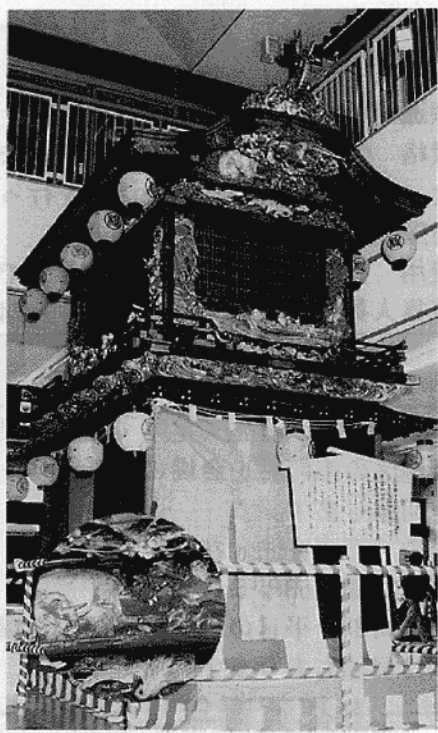
強飯を頂戴するものは、七難即滅、七福即生、家運長久などのご利益があるといわれ毎年多くの志願者があります。



春本番!

弥生祭

話題3つ



(その一) 日光に春を告げる二荒山神社の弥生祭に、今年も姉妹都市の八王子市と苦小牧市から、市長・議長・ミスらを本市に招き、四月十六日と十七日の二日間、好天に恵まれて華やかに繰り広げられた祭を堪能していただきました。(写真上)

(その二) 安永五年(一七七六)ごろの製作と推定される、弥生祭の本家体を松原町が復元、東武駅構内に展示、金箔金泥や天然の岩絵具で彩色された精緻な飾り彫刻が、観光客の目を楽しませました。(写真右)

(その三) 四月十七日、栃木県を訪問中の中国浙江省友

好考察団の一行四氏が、推津副知事らの案内で日光を訪れ二社一寺を見学、折からの弥生祭に感嘆の声をあげ、お囃しの少女らと記念撮影などを楽しまれました。(写真左)

